

補 遺

おかげさまで創立120周年記念式典も無事終了しましたので、今まで扱った内容の補足や分量的に中途半端なために扱えなかった内容等をまとめ、このコーナーも一区切りつけたいと思います。

【 「本高祭」から「玲瓏祭」へ 】

本荘高校の文化祭をいつから「玲瓏祭」と呼ぶようになったかについては、「八十年史」「百年史」には記載はありませんが、「白玲瓏」第七十号（平成4年3月7日発行）に「今年から玲瓏祭と名づけられた学校祭。全員一丸となって盛り上げました。」との記述がありますので、「玲瓏祭」という名称になったのは平成3年度からです。改名の経緯は、当時在職していた先生方やOB・OGに聞いてもはっきりしたことはわかりませんでした。しかし、当時の生徒会の意気込みは、前述の「白玲瓏」の次の文章に見て取れます。

「今年新たに本高祭から玲瓏祭と名前が変わって、心機一転取り組まれた。テーマは飛翔である。『玲瓏たる曙光が射す大空に向かって、たくましく右文尚武の両翼を拡げて雄々しく羽搏こう。』と校長先生（※第30代校長小島貞明先生）はおっしゃっていた。辞書で玲瓏という字を調べてみると、玲瓏…すきとおるように美しく輝くさま、とある。つまり本高の生徒の心は清く美しく輝いている、とっている訳である。」

ただ、そのすぐ後の文章で、クラスデコレーションの内容が喫茶店や縁日等に偏り本来の定義が失われつつあることを憂い、「これでは玲瓏祭と名を変えた意味がない。」と嘆いているところを見ると、内容一新とまではいかなかったようです。また、当時本高生だった本校職員数名に当時の様子を聞いても、名称変更のことはあまり記憶にないそうで、むしろそれまでの「本高祭」という名称のほうがなじみがあるとのことでした。実際、上記の「白玲瓏」にも、あちこちに「本高祭」という記載が見られます。「玲瓏祭」という名称は、時間をかけて徐々に定着していったようです。

【 女子一期生の証言 】

「本荘高校百年史」に、女子一期生の大谷裕子（旧姓：加藤）さんが次のような文章を寄稿しています。

「（前略）小学校六年から、男女共学制になっていたもので、女人禁制の男子校に入学するという気負いはなかったが、『おもしろそうだな』という好奇心はかなりあったような気がする。（中略）合唱や華道などの部活で活躍したり、乱れ飛ぶ野次の中、弁論大会で堂々の論陣を張った人もいた。文化祭で日本舞踊を披露した仲間が二人もいて驚いたこともあった。『新しい女性として、どう生きるかは、入学以来のテーマで、一年次の社会科の授業で、男子を巻き込み熱心に討論したこともあったし、三年次進路決定の時期にはストーブを囲み、女子も男子も意見を述べ合った。入学当初の校歌練習では『起て鶴城の健男子』を『健男女』と歌ったり、声を出さなかったりした。女子の一期生として、誇りめいたものを胸に生きてきた私たちも、平成十四年には六六歳、六七歳になる。』

【 なぜ由利本荘・にかほ地区は「中央」地区なのか 】

「（前略）戦前、本中は中央地区でなく県南地区に入っておったが、私が部長会議（※硬式野球）の時、本中は地理的に県南に遠征するには非常に困難（汽車の切符入手が難しく、夕方になれば宿泊の件もあり…）であることを主張し、中央地区に入れてもらった次第。それ以後は、どの運動種目も中央地区に入るようになったと思う。」（「回想記」佐藤順一郎）

【 修学旅行の中断と復活 】

コロナ禍のために、ここ2年間修学旅行が実施できていませんが、第二次世界大戦の終戦前後にも、修学旅行が途絶えていた時期がありました。同窓会報「玲瓏同氣」第六号の「三十五年目の修学旅行―四十三期・四期」という記事の中に次のような一節があります。

「戦時下の中学校生活は苦々しい思い出だけではないが、修学旅行のなかったこと、行きたいにも行けなかったことは、なにか青春の一コマが欠落しているようで、もの足りない、ホロにがい感じを免がれない」

昭和17年10月に実施された第37期生の修学旅行を最後に9年間の中断を余儀なくされ、戦後最初の修学旅行が実施されたのは昭和26年3月でした。旧制中学校最後の入学である第47期生の有志が当時の社会科教諭の三浦善次郎先生に要望したことにより実現しました。

「もともと旅行好きであった三浦はそれまで顧問をしていた園芸部員や有志の生徒らを鶴岡の砂丘、八幡平や田沢湖、八郎潟、寒風山と巡検・見学に引率していたからである。それらに参加しなかった生徒たちも、それらの話を伝え聞いていたし、また授業できく日本のふるさと奈良、京都への郷愁をかきたてられていた。」（「本荘高校八十年史」）

参加希望者を募ったところ、69名の生徒が応募してきたので、校長の了承を得た上で同僚の藤井純一先生にも一緒に引率してもらうことになりました。行程の決定、切符や旅館の手配はすべて先生方で行い、行きは奥羽線（東京経由）、帰りは北陸・羽越線経由の6泊7日（行きと帰りは車中泊）で関西方面を廻る旅でした。

「自分たちから希望し、出掛けただけあって、態度も真面目そのもので修学意欲旺盛、一生懸命メモをとるので奈良ではガイドさんにお褒めにあずかった。」（「本荘高校八十年史」）

これが修学旅行の「当時県内の高校での復活第一号」だったそうです。

【 日本一早い始業 】

「昭和二十年代から三十年代後半までの本荘高校は日本一早く授業の始まる学校であった。羽越線の上り、下り、それに矢島線とも七時前頃に羽後本荘駅に入る。列車本数が少なく、次の列車は九時台というダイヤでは、この列車ダイヤにあわせて七時半から四十分に始業せざるを得なかった。また帰りの列車も二時二、三十分頃に三線ともに集まっていたから、学校は早く始めて早く終わるようにしなければならなかった。列車通学生の大部分は起きぬけ、前の晩か、未明にオフクロさんが作ってくれた弁当を二つ持って家を飛び出す毎日であった。弁当のひとつは列車の中か、学校に着くなり食べる、朝ぬき弁当ひとつのものは、おそくとも一校時が終わった九時前に蓋をひらかぬとあとが続かない、市内の便乗組もつい早飯、早弁などという風習が広がってしまった。（中略）ようやく八時台に到着する列車がダイヤにくみこまれ、始業時刻が一挙に一時間おそくなったのは昭和三十六年度のダイヤ改正からであった。」（「本荘高校八十年史」）

「本荘高校八十年史」「本荘高校百年史」は、由利本荘市の中央図書館で貸出可能です。このコーナーに興味を持たれた方は、ぜひ実物を手に取ってみてください。

（文責：校長 熊澤耕生）